

---

---

橋本平八《裸形少年像》の鑿跡をめぐって

---

---

近代日本彫刻史の中で、橋本平八（1897～1935）ほど、異色性をもって語られる作家も少ない。《裸形少年像》、《石に就いて》、《花園に遊ぶ天女》など、院展で発表された彼の代表作品は、神秘的で論議を呼ぶ独創性において傑出するものである。彼は木彫の技能者としても確固とした評価を得ているが、彼の場合、皮肉にも確かな技能が却って院展での発表作品を難解なものにしていることも事実である。それというのも、彼は院展出品作を「何れも自分の彫刻の道程の先端を指示する最も鮮明なるもの」として特別扱いし、それぞれ例外的ともいえる異なった技法的処置を施しているからである。

しかし、橋本自身、その技法意図に関しては明確な説明を残しておらず、独特の論法で展開される彼の彫刻論が作品を謎めいたものにしてしまっている。これまでは、そうした謎めいたところのものをもって橋本の特徴として括られる傾向にあったが、この見方は一方で、作者橋本の人物像と作品が持つ構造との境界を曖昧にし、橋本作品の評論上に「精神性」というある種のバイアスを形成することにもなった。こうした中では、多くの場合、意図的な制作技術と偶発的な事態との混同が生じる。本研究が取り上げる《裸形少年像》の、作品表面に残る特徴的な刃物痕と背面に裂開する大きな木割れの問題はその典型である。

このような現状に鑑み、発表者は橋本平八の《裸形少年像》の実見調査を行った。この作品には「円筒形の形」、「求心的」、「木心」がキーワードに用いられ、橋本の木彫態度を具現する代表作とみなされてきたが、発表者は調査の過程で、これまでの《裸形少年像》に関する見解と相いれない技法と形態上の諸特徴を発見した。本発表では、こうして得られた作品の調査内容と彫刻制作の技術的な仕組みとを照合し、橋本の遺稿集『純粹彫刻論』における言説を読み合わせていくことで、橋本の本来の狙いが「木彫石彫刻の区別撤廃総括的に彫刻と改め」ることによる近代的彫刻手法の覚醒にあることを明らかにしていく。これは、「木のアニミズム」という靈性観念をもってされる傾向にある従来の橋本に関する論説に依らない、作品そのものの物的現象に即した新しい芸術解釈の方法論でもある。本発表の目的は、《裸形少年像》に認められる技術的な特性についての考察を通し、橋本平八の近代代彫刻史における再評価を試みることにある。